

芳賀敏郎さんの弟の達也です。敏郎さんは長男、私は末っ子で、14歳離れています。私が6歳で小学校へ入学したとき、付き添ってくれたそうですが、その時敏郎さんは20歳ということになります。随分離れているので、大人と子供という感じでもあり、茅ヶ崎の海水浴に連れて行って貰いサイダーやラムネを買って貰ったり、「少年朝日年鑑」や「巖窟王」などという本を買って貰ったりしました。高等学校で結核と間違えられて寝ているときには、小さな蓄音機と試聴版のレコードを持ってきてくれました。試聴版のレコードにはツゴイネルワイゼンとベートーベンのロマンスが入っていて、それを繰り返し聞いたので、全く音痴の私でもこの二つの曲は聴いて分かります。

高等学校で休んでいるときに化学の試験でひどい成績を取ったので、父から敏郎のところで勉強してこいといわれ、夏休みに市ヶ谷か駒込の社宅にいったことがあります。私と耕一さんは14歳違いなので、耕一さんが3歳の頃です。私は受験生ですから、大学試験用のことを習いたいわけですが、敏郎さんが一生懸命教えてくれたのは、試験には全く出ないことでした。一寸化学のことなど忘れてしまった人には申し訳ないのですが、炭素Cと炭素Cの結合軸の廻りの回転のことでした。CとCが2重結合だとそれは回転しないけど、一重結合だと自由に回転すると高等学校で教わります。敏郎さんが一生懸命説明してくれたのは、一重結合でも自由に回るのではなく、炭素についているものの種類によって、安定した位置と不安定な位置がある、ということでした。わたしは、けちくさい見方で、試験にでないものはいいから、試験に出るものを教えて欲しいと思いましたが、同時に、敏郎さんがその説明にすごく熱心だったことと、説明自体は非常に分かりやすかったことをよく覚えています。

この炭素と炭素の一重結合の回転の話は、大学3年生になってから詳しく聞きましたが、敏郎さんの説明を聞いていたお陰で、非常によく分かりました。そして、敏郎さんが炭素と炭素の一重結合の回転について、学生の時に書いた論文を探して読みました。それは短い論文ですが、アメリカの化学会というところが出しているJACS (Journal of American Chemical Society)という化学関係では最も権威のある雑誌に出されていました。

そこで、敏郎さんが24歳、私が10歳の頃に戻ります。私は兄と姉皆からかわいがられてはいましたが、皆から年が離れているせいで一人前に扱われないこと、特に泣き虫だと言われることが悔しくてなりませんでした。家族皆の泣くところを見たい、というのはその頃の大きな願望でした。雄彦さんは5歳上

だけなので、父に怒られて泣くところは何回かみていました。節子さんと明子さんも、山形で部屋に鼻紙を落としておいたということで、父に怒られて泣いているのをみたことがありました。唯一、敏郎さんだけは泣いているのを見たことがなかったのです。敏郎さんが泣いているのを見た唯一の機会は、後から思い出してみると、敏郎さんが大学を卒業して確か、阪大に助手の口があって、そこで学問を続けたい、ということで父浩さんと話をして、浩さんから、まだ弟や妹がいるから、長男であるお前は家計を助けろ、といわれたときだったと思います。そのとき、敏郎さんが論文をアメリカの有名な雑誌に出していて、研究者として有望な証である、といったことをいったのだと思います。それが、C-C 結合の回転の論文です。その時は分かりませんでした。大学の卒業研究でアメリカの科学雑誌に論文が採用されるのは、なかなか無いことだと思います。

今、浩さんの決断が正しかったかどうかは何とも言えません。しかし、その頃の経済状態が大変だったことは確かです。敏郎さんや節子さんや明子さんが家にお給料の一部を入れてくれて、それで雄彦さんや私が大学まで行けたことは間違いありません。そのことで恩着せがましいことをいわれたことなど勿論一度も無かったし、私が改めてお礼を言ったことも一度もありませんが、敏郎さんを始め、兄と姉のお陰だとずっと思っていました。その後、我が国の経済状態も我が家の経済状態も改善し、私が大学を卒業する頃には大学院に進むのが一般的になりました。しかし、父は私が大学院に行くのには強く反対しました。父は、達也を大学院に行かせるのは、敏郎さんや雄彦さんに申し訳ない、と思っていたのだと思います。

敏郎さんは、そのご統計学の分野で立派な仕事をされて、大勢のお弟子さんに慕われていたのは、お見舞いに来てくれた人の数にも表れています。直美ちゃんか淑子ちゃんに、輝いていたのは何時と聞かれて、人生ずっと輝いていた、と答えていた、と聞きました。敏郎さんが化学の分野で研究者になれなかったのは非常に残念でしたし、間接的に責任もあるようにも思いますが、統計学という別な分野で立派な仕事をされて、満足して天寿を全うされて、今はよかったな、と思います。

2016年1月27日

芳賀 達也